
活動報告

PCAGIP 事例提供者を体験して

中山美枝子*・村山正治*

要約

「PCAGIP」の事例提供者を初めて体験したことで、筆者が経験してきたこれまでのケース・カンファレンスとの違いがどのようなものであるのか考察した。「PCAGIP」という新しい事例検討法の何が事例提供者にとって意味があったのか検討し、ケース・カンファレンスのみではなく、様々な問題を抱えている現代社会において「PCAGIP」を適用できる可能性について考えた。

キー・ワード：PCAGIP、ありのままの自分、自分との対話

I. はじめに

筆者はこれまで様々な場でのケース・カンファレンスを体験してきた。ケースバイケースでもあるが、自分にとって事例提供をして何か新しい視点や気づきが生まれたり、終わった後の自分のケースへの理解の深まり感が増すようなことは少なかった気がしていた。要するに、ケース・カンファレンスで事例提供して本当に良かったと感じられた体験は少なかったと思える。

PCAGIPでの事例検討会の参加は数回してきたが、今回初めてPCAGIPで事例提供者を行った。その理由は、数か月前に中断したケースがあり、ケースとしては一旦終わっているが、筆者の心のなかではいつまでも終わっていないケースであったため、そのことに対して何とかしたい、もう一度今回のケースについて純粹に考えられる場が欲しいと思ったからである。

II. PCAGIPでの事例提供者としての体験

最初にファシリテーター役の村山先生がPCAGIPについての説明をしている段階で、村山先生の発する雰囲気が参加者にはグランドルールを守りながらも「やってみないとどうなるか分からないけれど、ありのままでもいいんだよ」という安心感が場の全体に浸透していった感じがした。

PCAGIPは方法ではなく、その根底にあるのは、安全安心の場で自分との対話が起り、色々なことが見えてくることでの理解から、人間には新しいことが生まれるという哲学があるように思われる。そして、事例提供者が主役であり、解決や結論ではなく安全な場で何かヒントになることがあればよいというPCAの考え方を援用するグループ体験の場でもある。それゆえ、ファシリテーターがどのような存在であるかが、場の雰囲気に影響していく大事な要素であると思われた。今回もスタートの段階で、

* 東亜大学大学院 総合学術研究科

PCAGIP は参加者の一人ひとりが主体として参加し、リサーチ・パートナーとしてみんなで創り上げていく場であることが再確認できた始まりになった。

今回の参加者は、事例提供者1名・ファシリテーター1名・記録者2名・金魚グループ6名・金魚鉢グループ9名の計19名であった。

金魚グループが順に様々な質問をしていき、その質問について筆者が考えていくプロセスの中で、このケースに対して自分の視点が少しずつ広がっていったような気がする。自分にとっては知っているクライアントのこと（もしかしたら、そうだと思っ込んでいたこと）でも、改めて質問されて答えるときに、1対1でクライアントと向き合っていたときに感じたこととは又違う視点で自分の思いと並行しながら改めて見つめ直すという状態になっていったのが、ケースへの視点の広がりにつながっていたのではないかと思われた。

筆者が担当したケースについてはアドバイジングやSVを受けていたが、一人で背負っているという気持ちが強く、今回のケースのように中断した場合、そのことを一人で引きずっていくというのが今までの自分であった。しかし、PCAGIP では、皆がこのケースを一緒に考えてくれているということが、これまでの様なレジュメを基に聞かれた質問に答えていくという一般的なケース・カンファレンスとは違いがあることを感じた。これまで一人で背負い込み過ぎて肩に力が入っていたのかもしれないと思えてきた。

今まで多く体験してきたケース・カンファレンスでは、事例の問題点の指摘に集中し、発言した人と言われた人が対立状態のような空気になったりすることもあり、意図せずとも裁かれるような場の雰囲気があり、筆者自身も事例提供に対し構えるようになっていた。しかし、今回 PCAGIP での事例提供者を体験し、これだけの参加者が筆者のケースを一生懸命一緒に考えてくれていると感じられ、皆と共にいて安心感のある中でクライアントのことをより理解していくことを共有している時間を過ごしている

と感じられた。確かにこれが「事例提供者 VS 参加者」でなく「事例←事例提供者&参加者」ということなのだなと思えた。

今回はファシリテーターの村山先生が最後に「～してみてもいかがでしょうか、というような提案」を試みられた。提案については、今までの「解決ではなく理解」とする PCAGIP の流れとは異なるもののように感じられた。「こうしてみてもいかがでしょうか」という提案が、人によってはあたかも今後の対応への答えのように受け取る人もいるのではないかとも思え、この問いかけは自分としては少し気になった。筆者個人の考えとしては、PCAGIP には答えのない問いかけを残していくことの方が大事なように思われた。

あくまで提案なので参加者それぞれの見方があるし、筆者が関わった今回のクライアントにはその提案が現実的にはそぐわないのではないかと思えるものもあった。ただ、もしこれが現在も継続中のケースであった場合には、他の人からの提案で自分一人だけで考える枠の範囲を超える視点が見えるのかもしれないと思え、提案については一長一短であるように感じられた。

Ⅲ. 参加者の感想

参加者からの感想を抜粋して、以下に記した。

「PCAGIP の精神に感動しました。この方法は誰もが幸せになる検討方法だと思いました。この方法は、色々なところで使用できると思いました。」

「今回の PCAGIP 法をとりいれたカンファレンスは、とても有効ではないかと思いました。難しいケースの場合、事例提供者が一人悩むことが多いと思いますが、安心してケースと向き合うことができるなあと思いました。」

「初めての PCAGIP でのカンファレンスで、学ぶことがたくさんありました。自分にとっても考えさせられる事例であり、PCAGIP でした。」

「記録係は大変だけれど、その分得るものも多くあるなと感じました。似たような質問も何度かあったかと思いますが、そこからハッとするような事例提供者からの返答やCLさんの言葉があり、それがとても胸に残りました。」

「記録をしながら、話を聞くのはとても大変でしたが、その分内容も良くわかりました。一人一人が周りの人、縁する人を思いやり、大切にしている気持ちというのは当たり前のように、難しいことなのだと思います。」

IV. まとめ

PCAGIP はこれまで筆者が経験してきた事例提供でのカンファレンスと全く違い、終わった後に感じたことは不思議と気持ちが軽くなって、心が楽になっていたことである。

中断後、ずっと気になっていたクライアントであったが、もしかしたらどこか別の医療機関に繋がっているのかもしれないし、何とかその人なりにやっていかれているのかもしれないという希望的推測を一人で思ったりもした。

今回の体験を通して、安全感を感じられる場ではありのままの自分と素直に向き合うことができ、誰かに教えてもらうことからではなく、カウンセラー自身でそのケースが立体的に見えてくるものから生まれてくるものがあり、クライアントとの関りでの自分自身の在りようがどうであるのかを見つめることができたように思う。

臨床心理におけるカンファレンスは、それぞれの現場の必要性に応じて様々なやり方を工夫して行っていけたら良いのではないかと考えている。ただ、従来型の事例検討会ではレジュメを基にして検討していくことが多く、そもそもそのレジュメはカウンセラーから見て作られたものであり、その土台そのものがズレていたら、私たちは何を基に検討しているのかと思う。伝言ゲームがしばしば事実から遠く離れて

いくように、臨床心理において刻々と変化する生きた人間を対象に関わるカウンセラーとして、すでに化石のようにになっているかもしれないレジュメを前提にして検討していくことへの疑問も感じる。

PCAGIP では、事前に準備したレジュメがないがゆえに、そこに縛られることなく解放され、深く自分と対話し、参加者の発言から見えてきた全体像や違う視点からも見ることで、視野の広がりから気づきがあったことが大きな発見だったような気がする。

PCAGIP をケース・カンファレンスだけではなく、世の中に潜んでいる様々な問題に適用することも考えられることができ、職場でも家庭でも批判しない安全安心な場で関係者が自分の視点からの思いを出し合える場があって、理解を深められる場があれば、抱えきれない悩みに押しつぶされずに生きていけるのではないかと思われた。社会変化の激しいこの世の中には正解などというものはないが、問題を解決するために「何かをする (doing)」というよりも、自分や相手への理解を深めてよりよく自分自身を生きていくために「どうある (being)」か探究していくなかに、それぞれの人にとって自分の生きていく道を見出せる大事な何かが生まれてくるのではないかと PCAGIP を通して考えた。

〈参考文献〉

- 村山正治・中田行重 (2012) : PCAGIP 入門 創元社
- 村山正治・中田行重 (2019) : 日本人間性心理学会第 38 回大会シンポジウム「日本の組織改革へ PCAGIP 導入の実際と社会貢献」
- 村山正治・嘉嶋領子・山本力 (2020) : 日本心理臨床学会第 39 回大会 教育・研修委員会企画シンポジウム「事例検討会を再検討するーケースカンファレンス再考ー」

Experience the PCAGIP case provider

Mieko Nakayama*・Shoji Murayama*

Abstract

Having experienced the "PCAGIP" case provider for the first time, I considered how it differs from the case conferences I have experienced so far. Examine what the new case study method called "PCAGIP" was meaningful for case providers, and think about the possibility of applying "PCAGIP" not only to case conferences but also to modern society with various problems.

Key words : PCAGIP, be yourself, dialogue with yourself

* Graduate School of Integrated Science and Art, University of East Asia